

社会主義への見果てぬ夢

嶺野修『グレート・ユートピア

—— 20世紀世界の改造を夢みた人たち ——』2013年

上 条 勇

I はじめに

北大の大学院時代からのわたしの友人でコミンテルン研究家である嶺野修氏は、2012年7月1日にその生涯を閉じた。ほう大な研究ノートとコミンテルン資料を残して。お互いに酒が好きだったので、わたしは、金沢大学に赴任した後も札幌にでかけた時は必ずといっていいくらい駅の地下街で彼と飲んだ。彼は、飲むほどに笑顔となり、タバコをふかしながら、「上条君」と言っては世の中の動きを皮肉る。そして最後には酔いつぶれる寸前となった。彼を家まで送り届けたこともある。

遅筆な嶺野氏であったが、彼のライフワークをなすコミンテルン3部作を計画するにいたった。最初に出版されたのは第2部である。『コミンテルンと帝国主義 1919-1932 —— 諸家による「相対的安定期の資本主義」論の位相と構図 ——』（勁草書房）というタイトルの800頁を超える大著であり、1992年に出版された。その目的は、コミンテルンの理論をスターリン的な「全般的危機」論に集約して批判し非難する風潮に対して、様々な理論家の、とりわけ「相対的安定期資本主義」論が決して「不毛」ではなく「もっとも示唆にとむ内容」をなしていたという事実を示すことにあった（「はじめに」iii頁）。すでに嶺野氏の該博な知識とほう大な勉強量がこの書によって示されていた。かかる嶺野氏にとって、ほぼ同時期に発表された加藤哲郎『コミンテルンの世界像』（青木書店、1991年）は、研究としてはとるに足らぬ「自己の青春への

レクイエム)にすぎないものであった。嶺野氏は、「コミンテルンを歴史の負の遺物とする風潮に迎合」した「独自性の少ない」「実りの多いといえない」書物であるとの書を切って捨てている(『嶺野修 遺稿集』私家版, 2013年, 70-71頁)。

3部作の第2部が出版されてから20年以上も過ぎた。そして第1部としてようやく本書『グレート・ユートピア』が2013年に出版された。しかし残念なことに遺稿として、である。本書は、当初は桜井書店からの出版予定で、初校段階まで進んでいた。しかし嶺野氏は2009年に病に倒れ、自分の手でこれを完成できずに残念ながら帰らぬ人となった。

わたしが嶺野氏から『グレート・ユートピア』のことを聞いたのは、7,8年ほど前のことであろうか。ある日突然札幌から金沢のわたしの大学研究室に嶺野氏から電話がかかってくる。『グレート・ユートピア』の原稿を送るからぜひ読んでくれと、彼は話してきた。話のなかではその自信のほどを示していた。しかし原稿は送ってこなく、わたしは肩すかしをくらった気がした。が、その後も嶺野氏は、出版に向けて準備を進めていたのである。

嶺野さんの同期の友人で、かつて北大図書刊行会に勤めていた前田次郎氏から相談をうけてわたしが手にしたのは、こうして『グレート・ユートピア』の原稿ではなく初校になった。前田氏は、引用の出典がたびたび示されない、表記の仕方が不統一であるなど、注があまりに未完なのを気にしていた。わたしは初校を検討し、結局、時間をかけてその困難な完成をめざすよりは、私家版にしてできるだけ早く出版した方がいいとの、前田氏と同じ結論に達した(本書、嶺野幸子「刊行にあたって」を参照)。本書は、未完であるが、すでに初校段階にあったのであり、完成まであともう少しのところまで来ている。また十分に興味深い内容を含んでいる。本書におけるトロツキーやブハーリンなどロシアからの亡命社会主義者たちの描写は出色である。

以上の理由から、第1部の本書が未完に終わり、第3部の『コミンテルンと世界政策 1933-1943』は計画のみに終わった。2010年2月6日付の本書の「あとがき」では「近刊予定」と書いてあるから、第3部には本書の出版後すぐに執筆に着手する予定であつたらしい。『嶺野修 遺稿集』にはその目次(2011年6月30日付)が掲載されている。それによると「ルーズベルト綱領」

(ニューディール政策)などアメリカが重要な位置を占めている。本書でも「アメリカニズム」が取り上げられているが、嶺野氏のなかでは第二次大戦後世界の資本主義を支配するアメリカがコミンテルンの理論家たちにどう取り扱われていたかが関心の的をなしていたと思われる。ところが嶺野氏は戦い半ばで亡くなった。第3部の目次をみるにつけ、その逝去が惜しまれてならない*。

*小稿は、2014年3月29日に専修大学サテライトキャンパスにおいて開催されたポスト・マルクス研究会の第5セッションで、わたしが行った報告に基づく。

II 『グレート・ユートピア』の視点

グレート・ユートピアとその終焉

嶺野氏から「グレート・ユートピア」というタイトルを初めて聞いた時、なかなかまいネーミングだと思った。嶺野氏は、本書の「はじめに」でこのタイトルに思いいたったエピソードを、こう書いている。

「この標題の直接の思いつきは、……ニューヨークを訪れたさいにみた『ロシア・アヴァンギャルド展』であった。初めて目にしたコミンテルンをモチーフとするタートリンの作品に圧倒され、またかれらアヴァンギャルドの想いに『グレート・ユートピア』と銘うっているグッゲンハイム美術館に妙に感心したことから始まった」(本書、5頁)。

「グレート・ユートピア」という標題は、グッゲンハイム美術館の用意したこの展示タイトルを借用したものである。この言葉からすぐに思い浮かぶのは、20世紀の歴史のかなりを占めた旧ソ連・東欧諸国におけるリアル・ソーシャリズムとその壮大な破産という事実であろう。人類の夢として(あるいは科学的必然として)マルクス主義者が描いた社会主義は、共産党一党支配のもと自由のない官僚的な社会をなし、行列に象徴される非効率な計画経済に変質しつつ、とりあえずは失敗に終わった。

しかし嶺野氏の想定している「グレート・ユートピア」は、これとは異なり、「世界生産から世界共同体」つまり世界社会主義を実現することを夢見て世界革命を追求する思想である。嶺野氏は、かつて社会主義とは希望の原理をなし、

「グレート・ユートピア」をなしたと述べる。しかし、他方で社会主義を考える場合、嶺野氏は、いちじるしく世界革命と世界社会主義の実現に傾斜していた。これは、嶺野氏がブハーリンをこう評価していることにも示されている。

「人類の未来社会を世界革命から共産主義の世界社会へと、もっとも実現可能の軌跡としてあらためて見通しをたてたのは、多くの社会主義者のなかでもロシアの青年ブハーリンだったとみてよいだろう」(本書、11頁)。

もっとも世界革命から世界社会主義を展望する考えは、ブハーリン独自のものというより、トロツキーのみならずレーニンらロシア・マルクス主義者たちが共有するものであった。彼らは、その帝国主義論の理論認識のもとに社会主義の世界革命を夢見、そして追求した。そしてこの世界革命を担った組織として形成されたのがコミンテルンであった。

ところが先進国社会主義を実現するものとしてレーニンらが期待した、第一次大戦後におけるヨーロッパの諸革命は不発に終わるか次々と挫折していった。レーニン死後権力を握ったスターリンは、一国社会主義建設に走り、ロシア・ナショナリズムに陥っていく。スターリンがヒトラーのドイツと「独ソ秘密協定」(独ソ不可侵条約、1939年)を結んだ時、世界革命を担ったインターナショナル組織であるコミンテルンは事実上とどめを刺され、すぐ後に解散せざるをえなかった。

コミンテルン研究家である嶺野氏が描く「グレート・ユートピア」の終焉とはまずはコミンテルンの終焉であった。そしてかつての夢の「とるに足らぬ」残照とも言える旧ソ連・東欧諸国におけるリアル・ソーシャリズムの終焉でもあったのである。

世界革命論の経済学的基礎としての帝国主義論

レーニンらロシア・マルクス主義者たちが夢見た「グレート・ユートピア」である世界革命と世界共同体実現の構想を基礎づけたのは、彼らの経済学すなわち帝国主義論であった。19世紀末から20世紀にかけての時代を通例「帝国主義の時代」と呼ぶ。この時代は資本主義が歴史的に大きく変化した時代であった。当時青年であった社会主義者たちのある者は、自由競争の資本主義

から独占と金融資本の支配する資本主義への変化として、これを認識した。あるいはとくにロシアなどからの亡命社会主義者たちは、資本主義が単一の世界体系(今日的に言えばグローバリゼーション)に発展したとも認識した。「世界生産から世界共同体」を実現する、すなわち資本主義の世界生産を社会主義の世界共同体に置き換えることが夢見られた。こうして帝国主義戦争である第一次大戦を契機に、資本主義が崩壊し死滅するという考えに基づき、世界革命が追求された。もう一度確認すると、「グレート・ユートピア」とは、「世界生産から世界共同体」を実現する夢であった。そして「世界生産」への資本主義の歴史的発展傾向を理論的に示すものとして、本書では諸家の帝国主義論の説明が大きな位置を占める。「グレート・ユートピア」というタイトルから社会主義に関する著書を思い浮かべた読者は、帝国主義論の諸学説に関する経済学的説明の多さに少し驚くかも知れない。

Ⅲ 『グレート・ユートピア』と帝国主義論の学説史

帝国主義論史の視点から

嶺野氏といえばコミンテルン研究者とりわけプハーリン研究者というイメージがある。しかし本書のとりあげる社会主義者は、プハーリンなどロシアからの亡命者のみでない。ドイツやオーストリアで活躍したマルクス主義者も広くとりあげられている。その理由は、マルクス以後第一次大戦までの国際社会主義運動が第二インターナショナルの時代で、とりわけドイツ社会民主党(SPD)がその中心的な役割を果たしたことにある。ドイツ・マルクス主義者とオーストリア・マルクス主義者(オーストロ・マルクス主義者とも言う)は、帝国主義論の形成においても大きな役割を果たした。後にロシア革命を指導し、またコミンテルンで活躍したロシアからの亡命社会主義者は、当時、むしろ傍流であったときえ言える。本書で嶺野氏は、本流と傍流がロシア革命を契機に逆転した事実を皮肉まじりに述べている。嶺野氏は、これまでドイツやオーストリアを中心的な対象としてなされてきた帝国主義論史研究にあたかも切り込み、そのなかで自らの地歩を占めようとするかのような意欲を示している。

その際注目されるのは、本書では亡命社会主義者が重要な位置を占め、これと対置される形でドイツ、オーストリアの社会主義者が取り上げられていることである。本書で出色なのは、亡命社会主義者の描写である。嶺野氏は、「世界革命の構想はウィーン、パリ、ニューヨーク、モスクワなど世界都市を渡り歩いて『世界の改造を夢みた人たち』が獲得したものだ」(本書、286頁)と述べている。本書における亡命社会主義者の動向の描写は他の追従を許さないといいほどのものである。嶺野氏は、コミンテルン研究家の持ち味を生かしつつ、2つの社会主義者の潮流を対置する。この対置は、本書全体を貫くものである。

2つの潮流のこうした対置は、帝国主義論史研究において本書に独特の特色を与える。通例帝国主義論史研究においては、故星野中氏が示しているように、世界資本主義論的系譜(パルブス、ローザ・ルクセンブルクら)と「社会化」論的系譜(ヒルファディング、レーニンら)に分けて、前者を消極的、後者を積極的と位置づける傾向があった(もっとも故松岡利道氏のようにグローバル化の視点にたつてルクセンブルクを高く評価する見解もあったが¹⁾)。それに対して嶺野氏は、世界革命の視点、「世界生産から世界共同体」を実現する「グレート・ユートピア」の視点から、世界資本主義論の系譜を非常に高く評価している。パルブスの影響を受けつつ形成された世界資本主義論の系譜を、レーニンが独占と金融資本を基底に置くことによって完成させる。嶺野氏は、この意味で、レーニンが2つの潮流の理論的総合者であったと考えるのである。

亡命社会主義者と西欧マルクス主義者との対置

もっとも嶺野氏は、わたしのこのようなまとめには異を唱えるかも知れない。嶺野氏の頭の中には、帝国主義論の2つの系譜というより、あくまでも亡命社会主義者とドイツ、オーストリアのマルクス主義者の対置があった。本書は、このような対置をしつつ、レーニンの帝国主義論の形成とロシア革命にいたるまでの亡命社会主義者たちの動向、そしてレーニン以後のプハーリンとトロツキーの動向を明らかにする。この点に注目するならば、本書では、レーニンを主軸としつつ、その前後をプハーリンとトロツキーが飾って

いる。それに対して、カール・レンナーを例外として、ドイツ、オーストリアのマルクス主義者たちは、帝国主義論の形成に重要な役割を果たしたとして本書で大きく取り上げられるが、実際には脇役にすぎなかった。そしてこの両者の対置を直接示したのが、本書の第3章「『他者』の怨念」と第4章「ナショナリティ」であった。

第3章では、パルヴス、ブハーリン、トロツキー、ローザ・ルクセンブルクら亡命社会主義者たちがおもに取り上げられる。彼らは、資本主義が単一の世界体系となったという「世界資本と世界生産」(本書, 61頁)の視点に立って、世界革命を展望する。「『他者』の怨念」という標題は、西欧に亡命して、その地に根を下ろさず、コスモポリタンになった亡命者の怨念であった。こうした怨念が世界革命ひいては「グレート・ユートピア」の駆動力となった。

それに対して第4章では、ドイツ、オーストリアのマルクス主義者、とりわけカウツキーとヒルファディングが中心を占める。「マルクス主義の法王」と言われたカウツキーは帝国主義論の形成に多大な理論的影響を与えた。ところがこのカウツキー(そしてヒルファディング)が世界革命を放棄し、ドイツ・ナショナリストに転じていく。後にレーニンは、彼らを厳しく批判することになる。周知のように、レーニンの「帝国主義論」は、「カウツキー批判の書」でもあった。ナショナリストに陥ったドイツ、オーストリアのマルクス主義者は、とりわけ第一次大戦を契機に世界革命つまり「グレート・ユートピア」から決定的に脱落したのであった。

2つの潮流のこうした対置は、帝国主義論史研究において本書に独特の特色を与える。本書の視角はこうである。

帝国主義論の諸家は、多かれ少なかれ資本主義の世界化傾向を指摘しており、最初はインターナショナリストでもあった。しかしその後、道は2つに分かれる。亡命社会主義者は、あくまでも世界革命、「グレート・ユートピア」を追求した。彼らの立場は、あくまでもコスモポリタニズムであった。それに対して、ドイツ、オーストリアの社会主義者たちは、いかにすぐれた帝国主義論の理論認識を示したとしても世界革命を放棄し、ナショナリストに「転落」していった。つまりグレート・ユートピアの蹉跌は、西欧社会主義者たちの、それからの脱落からまずは生じたと言える。

もともとパウアーだけは奇妙なことに最初からナショナリストであったと位置づけられている。実際には、パウアーが、インターナショナリストとしてヨーロッパ合衆国ひいては世界連邦国家の形成を夢みていたにもかかわらず、である。

帝国主義論史とレーニンの評価

現在わたしは、帝国主義論史において、現代経済学の理論的な関心から、景気循環論、株式会社論、経済政策論などについて独創的な理論研究をしたヒルファディングを高く評価している。むしろ経済学理論の点では、レーニンよりヒルファディングの方が優れているとも考えるのである。とはいっても「5つの基本標識」に基づくレーニンによる帝国主義の(経済学理論というより)特徴づけは見事だと思う。にもかかわらずレーニンは日々その影響力を失っていつている。

それに対して、嶺野氏は、レーニンの『帝国主義論』を帝国主義論の到達点とか最高峰と見る点で、意外と研究の古典的な立場を維持している。この点、嶺野氏はこう述べている。

「……レーニンがロシアのみならず西欧マルクス主義の土壌にはぐくまれ、かれの著作『帝国主義論』がそれらの思想を継受し、広い意味で第二インターナショナルの理論的な枠組みにあって、19世紀末以来の修正主義論争や帝国主義論争を総括する位置にあることは、今日にあっては誰しも疑わないだろう。これまでの学説史上の通説は、なお覆されていない。」(本書、78頁)

確かに以上の「学説史上の通説」は堅固なものである。また世界資本主義論的な立場にたちつつ、社会主義者の、帝国主義論の2つの系譜を総合させるものとしてレーニンを位置づける嶺野氏の見解は、ユニークであるし、それ自体としては興味深い。

「あとがき」で述べられているように、本書で主軸をなしているのはレーニンである。すべての叙述はレーニンに流れ入っていくと言っても言い過ぎではない。レーニンは、カウツキー、ヒルファディングら西欧マルクス主義者の資本主義・帝国主義論から学ぶのであるが、彼らがナショナリストに「転落」するにしたがってその批判を強める。

他方、亡命社会主義者のなかではトロツキーとブハーリンが「資本主義の単一の世界体系」論に基づく帝国主義認識を打ち出しており、帝国主義論形成においてレーニンに先行していた。しかし第一次大戦中彼らの理論の弱点が顕現した。トロツキーはカウツキー流の超帝国主義論に陥り、ブハーリン(そしてピャタコフ)は民族自決権の否定にいたる。レーニンは、カウツキーを批判すると同時に、トロツキー、ブハーリンを克服するために帝国主義論を書いた。こうした叙述の流れが本書を構成しているのである。

その際、本書で嶺野氏は、帝国主義認識のみならず現代資本主義認識においても手放しにレーニンを評価しているように思われる。嶺野氏は、ロックフェラーらアメリカの世界トラストに関するレーニンの指摘に資本主義の単一の世界体系、世界共同体の実現を可能とする世界生産の成立を見出している(たとえば、本書、200頁)。他方では、独占が商品生産、古い資本主義、競争という環境のなかで存在する事実、不均等発展、世界経済の「寄木細工的現実」を強調するレーニンを高く評価する。とりわけ世界経済の「寄木細工的現実」という指摘は、資本主義の単一の世界体系論にたつて民族自決権を否定するブハーリンやピャタコフらを批判する武器となる。世界においてはブルジョア革命(と民族国家の建設)に当面する民族があり、民族自決権は現実的な意味を持つというのだ。民族自決権と絡めてヒルファディングやレーニンの帝国主義論を論ずるのも、嶺野氏の特徴をなしている。

嶺野氏は、こうした「独占」、「不均等発展」、「寄木細工的現実」といったレーニンの理論認識が後のコミンテルン理論家によってどう継承されたか、あるいは継承されなかったかを基準にしてコミンテルン研究を行う。さらには帝国主義論の世界資本主義論的系譜と、独占を規定にすえることでその頂点にたつレーニンと直結させる形で現代のグローバリゼーションを語る。そしてなおも自らの夢としてグローバリゼーションから「世界共同体」へのユートピアの実現を展望していく。つまり嶺野氏は、帝国主義論史と現代資本主義論を直結させる学説史的立場にたっている。

しかしこれにはわたしは批判的である。第二次大戦後現代資本主義の力強い発展に直面してきた我々は、資本主義の最高段階、死滅しつつある段階と帝国主義を規定したレーニンの帝国主義論を再考することを要請されている。

理論的には、帝国主義論の時代的制約を超えた現代資本主義論の構築を必要としている。もっとも学説史・思想史研究においては、帝国主義論の時代的制約性を意識しながらも、帝国主義戦争と資本主義の危機にいたる「帝国主義の時代」の時代認識・世界認識として学説を綿密に評価すべきであろう。この点で、わたしも、経済学理論的な不満を抱えながらも(たとえば恐慌論・景気循環論が今日の経済学的理解において重要な位置を占めるが、レーニンにはない)、当時の帝国主義論を「総括」する到達点としてレーニン理論を評価している。しかし現代資本主義論の視座からは、その理論的限界とか時代的制約性をも指摘する必要がある。

レーニンにおける「独占」と「寄木細工的現実」の意義を強調する嶺野氏の見解に直面して、私事ながら、わたしの北大大学院時代を思い出してしまった。じつはレーニンにおける「独占」、「寄木細工的現実」、「寄生性と腐朽化」、「投機」の問題の意義を強く主張していたのは、我々の大学院の指導教官をなした森杲先生であった。当時森先生は、この視点にたつて、「相対的安定期の資本主義」の分析視角を構築しようとしていたと思われる。我々においては、その影響下に、嶺野氏がコミンテルン研究、わたしが第二インターナショナル(SAI, 社会主義労働インターナショナル)研究と、意図せざる役割分担ができていったようである。

本書を読んで、嶺野氏が、その古い問題意識を維持し、これを現代資本主義認識に直接適用する方向を歩んだことをあらためて実感した。しかしわたしの方は、その後、現代資本主義論の研究を進めて、レーニンの時代的制約性と限界を強調する立場に転換していった。

Ⅳ ナビゲーターとしてのカール・レンナー

本書の性格について、「あとがき」に次のような記述がある。

「……第一次大戦を前後する社会主義者たちの世界認識を、論じられることさえいままなお厭われるレーニンを軸にカール・レンナーをナビゲーターに試みた、当時の世界に身を置いて考えてみた社会主義世界像といえるかもしれない」(本書、286頁)。

本書におけるオーストリア・マルクス主義者レンナーの位置づけは大きい。レンナーといえば、最近その民族自治論が注目されているが、これまでの帝国主義論史研究で取り上げられることはほとんどなかった。ところが嶺野氏は、本書でレンナーを大きく取り上げる。第2章では、「『国民国家の限界』説と『自由な世界経済』の創設を提唱」(本書, 36頁)し、トロツキーの世界資本主義認識に非常に大きな影響を与えた人物として、である。第4章では、レーニンの帝国主義論形成に多大な影響を与えた人物として、である。第5章ではトロツキーの「一大国から世界国家になるであろう戦勝国の資本家階級による世界経済の搾取」という世界資本主義認識との関連でレンナーが登場する(本書, 142頁)。第7章では、「もうひとつの相対的安定の資本主義論」を提起した人物としてレンナーが大きく取り上げられる。

本書第4章は、第5章とともに帝国主義論史においてレーニンの帝国主義論形成にいたる道筋を示したものである。そこにおけるレンナーの取り扱いが、「帝国主義論史研究者」としての嶺野氏の独特の立ち位置を示している。第4章は、レンナーの次の指摘を取り上げることによって論述が進められることになる。

「資本主義の最新の局面を、国民(民族)的帝国主義としてもっとも早く承認し、もっとも鋭く分析したのがオーストロ・マルクス主義のオットー・パウアー、ルドルフ・ヒルファーディングそしてオーストリア人のカール・カウツキーだった」(本書, 83頁)²¹。

かくしてレンナーをナビゲーターとして第4章では、上記の人物たちが取り上げられ、レーニンにまで言及されていく。もちろんオーストロ・マルクス主義者としてレンナー自身も重要な位置を占める。嶺野氏は、戦争勃発して間もない1915年に発表されたレンナーの論文「戦争と国民的思考の転換」と「帝国主義とは何か?」を取り上げる。多少わかりづらいとも思われるが、嶺野氏によるレンナー評価を取り上げよう。第一の論文について、こう評価される。

「トロツキーの観点に通底する、国民国家→『国民的帝国主義』、『国際的な国民国家』(イギリス帝国)→『世界帝国』ないし『世界連邦国家』へという国家の発展史観をしめすといえよう。しかもレーニンのホブソン再評価につながらないか。いわばレーニン理論への橋渡しの位置にあるともいいうるだろう。この役割を果たしたのがレンナーの論稿であった」(本書, 126頁)。

第二の論文は、ヒルファディングの『金融資本論』に学び、金融資本が「国家的に組織され、完結された経済領域」を「勢力範囲」とする膨張衝動に走ったことが現代史を特徴づけると論じたものであった。レンナーによれば、帝国主義とは「現在におけるもっとも高度に発達した経済システムの政治的表現である」。このレンナーに対して、嶺野氏はこう評価する。

「この所論はバルルス以来の『帝国主義』の問題のレンナー的な解答になっている。エンゲルス→ヒルファディング→ブハーリン→レーニンの系譜におけるキー・ストーンの論稿といえるだろう……ヒルファディングの金融資本と経済領域概念を主軸に組み立て、ブハーリンからレーニンへの帝国主義の観点と解せる論稿で、ウィーンの社会主義者の帝国主義認識を代表していると評価しえよう。実質的なレーニンの帝国主義論の観点に影響をあたえたと考えても不思議ではない」(同上)。

以上のように、嶺野氏によるレンナーの評価は非常に高い。また我々は、帝国主義論の経済学史的研究においてレンナーの帝国主義認識が嶺野氏によって初めて示されたとも言えよう。しかし本書を読んで、レンナーのこの高い評価がなかなか理解できないのだ。わたしは、帝国主義認識の点では、レンナーがヒルファディングを一歩も出るものではないと感じた。にもかかわらず嶺野氏がレンナーを高く評価するのは、「世界生産から世界共同体へ」という「グレート・ユートピア」の視点に関連しているのではないか。「グレート・ユートピア」は、資本主義が単一の世界体系となったという観点から世界革命を導き出す思想である。もちろんレンナーは世界革命家ではない。嶺野氏は「社会帝国主義者」であるときえ断じながら、レンナーの世界経済の視点を高く評価する。

両大戦間期には、レンナーのこの視点が、より鮮明に打ち出される。嶺野氏は、戦後におけるアメリカ資本の支配など世界経済の変化に注目したものとして、レンナーの諸論稿を取り上げる。とりわけレンナーの1928年のレンナーの論文「戦後の社会主義政策の世界経済的基盤」についてこう述べる。

「……戦争から戦後資本主義世界がしめた本質的な転換を正当にとらえていた。金融資本から『世界資本』への時代であった」(本書、243頁)。

つまりレンナーは、戦争によって「はじめて最終的に世界全体が資本主義化

した」ととらえる(本書, 241頁)。そして「『国民的金融資本の自己支配』時代が終わり、世界資本としてのアメリカ的金融資本の支配する世界経済の到来を明示する」(本書, 244頁)。

このように嶺野氏は、「世界共同体」をめざす「グレート・ユートピア」の視点から、資本主義の単一世界体系の形成を述べるレンナーの帝国主義認識を高く評価する。世界革命とはあまりかわりのないレンナーの戦時中の考え、つまり国民国家→多民族国家→世界国家という発展が歴史的必然であるという考えをも高く評価する(嶺野氏は、この考えがレンナーの民族自決権否定論に結びついていくことには言及しない)。レンナーはまた金融資本(後に世界資本)の理論と「資本主義の単一世界体系」論を結合する。先に述べたように嶺野氏は、レーニン理論に、これまでの研究で世界資本主義論的系譜と「社会化」論的系譜と2つの系譜に分けられてきた帝国主義論の系譜の総合を見出す。その結節点にレンナーを位置づけているように思われる。この辺に嶺野氏によるレンナーの高評価の理由があるのではないだろうか³⁾。

V 帝国主義論史余滴

パルヴス、カウツキー、ホルテル

「あとがき」にも見られるように「ナビゲーター」として重要な位置を占めたと考えられるので、嶺野氏によるレンナー評価について少し長く紹介してきた。本書でレンナーは、キー・パーソンを占める。その他にも本書で重要な役割を果たす人物が幾人も存在する。パルヴス、カウツキー、ホルテルがそうである。彼らは、帝国主義論形成に大きな役割を果たし、またブハーリン、トロツキー、レーニンらに重要な影響を与えた。

パルヴスは「革命の商人」⁴⁾と言われ、後に事業に成功し、金持ちになって革命戦線から離脱していく。が他方で、帝国主義論形成の出発点において大きな影響を与えた人物として評価される。彼については、これまで河西勝氏⁵⁾の研究に基づき、故降旗節雄氏が³⁾、『帝国主義論の史的展開』(現代評論社, 1972年)において、世界資本主義論的系譜の出発点にすえるという大きな位置づけを与えてきた。それに対して嶺野氏の著書の特徴は、世界資本主義論形

成において亡命時代のブハーリン、トロツキー、さらにはローザ・ルクセンブルク、カウツキー、ヒルファディングに与えたパルヴスの影響を大きく取り上げていることにある。そしてパルヴスは亡命社会主義者の出発点に置かれた。

カウツキーについては、これまで学説史的な研究においては修正主義論争の一方の当事者、また保住敏彦氏の研究に代表されるように帝国主義論前史の立役者として、さらにはヒルファディングの帝国主義認識との比較において取り上げられた。相田慎一氏の独自のカウツキー研究もある。もちろんレーニンの『帝国主義論』が「カウツキー批判の書」であったことはよく知られている。嶺野氏の著書の特徴は、カウツキーの諸著作によく当たり、その帝国主義論そして超帝国主義論の特徴を比較的詳しく分析していることにある。特に帝国主義を資本主義の単一の世界体系ととらえる彼の世界資本主義論的視角を浮き彫りにした叙述、インターナショナリストからナショナリストに「転落」していった経緯に関する説明は、興味深い。もちろん本書における比重は、レーニンとのかかわりにある。最初カウツキーの多大な影響下にあったレーニンがカウツキーの「裏切り」に直面して、いかに葛藤し、その批判を企てるにいたったかの叙述は興味深い。

またロシアにおける社会主義建設の点で、レーニンが「カウツキーに学べ」と叫んだエピソードもおもしろい。マルクス主義は、「科学的社会主義」の名のもとに未来社会の「空想」を描くことには禁欲的であった。しかしその反面で社会主義(その高次の段階としての共産主義)に人類の「理想社会」の実現を見出す、いわば「社会主義パラダイス」論を抱いていた。科学と理想そして現実の「落差」がリアル・ソーシャリズムの実験を通してマルクス主義に「苦悩」をもたらす。カウツキーは、『社会革命論』(1902年)を著して、マルクス主義者としてはめずらしく未来社会としての社会主義を比較的詳しく描いてみせた。カウツキーのこの『社会革命論』を大きく取り上げているのが、嶺野氏の大きな特徴をなしている。わたしも、後のオーストリア、ドイツ革命における社会化運動と「社会化」論、それに国際社会主義運動が共産主義と社会民主主義に分かれていった経緯を説明する上では、カウツキーの『社会革命論』は必読書であると思う。

嶺野氏の著書では、レーニンによるカウツキー批判が大きな位置を占める。

その際、カウツキーのいわゆる「超帝国主義論」への批判が中心をなす。これは、当時カウツキーの「超帝国主義論」の影響を受けたトロツキーら、そして「ヨーロッパ合衆国」論を克服するというレーニンの意図に関連している。嶺野氏は、しかし、あまりにレーニンの立場にたち、またレーニン理論を現代資本主義論に直結させる立場にたつて、この「超帝国主義論」批判を無条件に受け入れているように見える。この考えと本書終章(第9章)は若干の齟齬をきたしている。終章ではこう述べられている。

「グローバル資本(主義)は、『一つの巨大な国際経営者階級を形成』し、国際コミュニティ、いわば『世界権力』ともいうべき『世界的意思決定システム』をつくりつつあることを想起してよい」(本書、281頁)。

嶺野氏は、「世界的な『単一の絶対的権力』」の形成を想起する。そしてそこから進んで未来における「世界共同体」の実現を再び夢見るのである。しかし、これこそカウツキーのいう「金融資本による世界の共同搾取」すなわち「超帝国主義」的状况ではないか。第二次大戦後アメリカを中心とした世界資本主義の「超帝国主義」的状况が生じている。この状況に直面してカウツキーの「超帝国主義論」を見直す動きさえある。嶺野氏は、本書で示されるこのくい違いをどう説明するのであろうか。現代資本主義論の視座にたつて帝国主義論史研究を進めてきたわたしは、この辺のところを嶺野氏から是非ともお聞きしたかった。

本書の特徴の一つをなすものとして、オランダの国際主義者ヘルマン・ホルテル(嶺野氏は、「レーニンよりも左翼」という)の『帝国主義、世界戦争および社会民主主義』(1914年10月)を高く評価していることがあげられる。この書は、いち早くカウツキー批判を行い「その後の評価の基準を提供」(本書、150頁)し、またレーニンの帝国主義論の形成に直接影響を与えたものとして位置づけられる。この書は、「トラストと大銀行など『帝国主義的世界資本』」が「一つの全体として」世界を支配する事実を強調し、「『帝国主義か社会主義か』の二者択一」を迫ったものであった(本書152-153頁)。帝国主義の寄生性、不均等発展と世界の再分割などを論じ、レーニンがトロツキー、プハーリンらの世界資本主義論を乗り越えて独自の帝国主義論を形成するにいたる上で、直

接的に影響を与えた⁶⁾。ホルテルは後にコミンテルンの極左派になる。このホルテルを帝国主義論史に位置づけたのは、コミンテルン研究家嶺野氏の面目躍如たるものであろう。

さらに本書では、ハインリッヒ・クノーによるレーニン『帝国主義論』批判を取り上げる(本書、238頁以下)など、帝国主義論史ではマイナーと思われる人物にも目を配っている。カウツキー、ヒルファディングらがレーニンの『帝国主義論』を無視したのに対して、クノーはこれを正面から取り上げている。本書には、帝国主義論史の専門家のひとりりを自認するわたしが赤面するほど、わたしの知らない興味深い記述が多く含まれる。

ヒルファディングの評価に対する疑念

本書の該博ぶりに感嘆ばかりしてられない。少し細かい詮索とも思われようが、わたしの専門研究の対象をなすヒルファディングとパウアーに関する評価について、嶺野氏に疑問を呈しておこう。まずヒルファディングに対する評価を見てみる。

第一に、カウツキーが独占と社会的生産について「アメリカの砂糖トラストとウイスキー・トラスト」を例に取り上げたのに関連して、嶺野氏は、「ヒルファディング的な重工業に特化した独占形成論の一面性を浮き彫りにしてないだろうか」と指摘している(本書、88頁)。しかしヒルファディングは『金融資本論』でアメリカのタバコ・トラスト(『金融資本論』(2)、林要訳、国民文庫、55頁)などに言及している。彼は、「ニューヨークで最も研究しうるであろう、資本主義的競争の理論」(ヒルファディングのカウツキー宛ての手紙)に注目し、またカルテルが経済の全分野に広がる「総カルテル」論を唱えた。たとえヒルファディングが重工業における独占形成を重視したとしても、それは「古典的帝国主義の時代」においては重工業が基幹産業をなしたからである。ヒルファディングが重工業以外の独占形成に目を配らなかつたわけでは決していない。

第二に、嶺野氏は、『金融資本論』におけるヒルファディングの世界像が後年のコミンテルンにおけるブハーリンの主張と同様に、「資本の究極の表現としての『単一の世界トラスト』だといえるだろう」(本書、108頁)と述べてい

る。これはおかしい指摘である。確かにヒルファディングは、一国の枠内で「総カルテル」の形成に純経済理論的に言及したが、これは社会的・政治的に不可能事であるとその現実性を否定した。そしてその上で、諸列強による「経済領域」の拡大・争奪戦に帝国主義と世界戦争の原因を見出しているのである。

第三に、第二に関連して、「全世界を単一の経済領域に結び合わす自由貿易」が「もっとも合理的な国際分業」を可能にするというヒルファディングの指摘を受けて、嶺野氏はこう述べる。「したがって社会主義か自由貿易かの二者択一を迫ることになる」(本書, 108頁)。嶺野氏は、ここに「ヒルファディングのマンチェスター主義」(本書, 105頁)を見出す。しかし実際には『金融資本論』でヒルファディングは、帝国主義に対して自由貿易ではなく社会主義を対置した。自由貿易政策を反動的なものを意味するとみなした。ヒルファディングが帝国主義に自由貿易を対置したのは、第一次大戦以降である。この点は、これまでの我が国における帝国主義論史研究において重要な論点をなしてきたのであり、以上の区別をしない嶺野氏の指摘は不正確である。

オットー・バウアーの評価に対する疑念

次にバウアーに対する評価を見てみよう。ここでは民族の問題が重要な位置を占める。第一に、嶺野氏が「ロシアと同じ『諸民族の牢獄』ハプスブルク帝国」(本書, 41頁)と述べているのは歴史認識の重大な誤りである。ハプスブルク帝国は絶対多数をなさないドイツ人が諸民族の力関係を配慮しつつ統治したのであり、決して「諸民族の牢獄」ではなかった。嶺野氏は、バウアーについては、「1908年のボスニア・ヘルツゴヴィナのオーストリア＝ハンガリー帝国への『併合』に対決しえなかったバウアーの『文化的使命意識』は『帝国意識』と重なると指摘している(本書, 40頁)。実際には、バウアーは、これを対象にして論文を書き、「併合」が帝国政府の危険な帝国主義的冒険政策であると批判している。

第二に、嶺野氏は、バウアーが、レーニン同様に「資本主義の発展の当然の産物として民族の計画的な強制、融合と平和的な同化があくまでも進行」という民族観に立っていたと指摘する(本書, 41頁)。実際には逆で、バウアー

は、社会主義において民族文化が開花し、「社会主義的民族」が形成されると考え、将来における民族の「接近・融合」論には決して立たなかった。

第三に、嶺野氏は、パウアーがあくまでもオーストリアの行政改革において民族問題の解決をめざすナショナリストであったと決めつける。「パウアー的マゼツハ主義」という言葉さえ用いている。マゼツハ主義とはオーストリア熱狂主義のことを意味する。嶺野氏は、オーストリアの行政改革としての民族自治しか構想しえない、オーストリア・ナショナリストであるパウアーがようやくその態度を変えたのは、第二次バルカン危機に直面してのことだったと指摘する。この点、嶺野氏はこう述べる。

「帝国の枠組みとしては、『生存能力ある自治的諸民族の連邦国家』と『帝国の解体と各民族の国民国家形成』の二者択一を、とくに後者を13年後半から示唆するようになった。ようやくかつての見解に批判的な見地がパウアーにみられるようになる」(本書、49頁)。

嶺野氏は、かくして『『オーストリアの解体に労働者の期待を向ける』宣伝の必要性を、パウアーに認識させる』(同上)にいたると考える。しかし、主著『民族問題と社会民主主義』(1907年)においてすでにパウアーは、帝国主義戦争がハプスブルク帝国のオーストリアを解体するという予測を述べていた。また「帝国主義的民族性原理」に対するプロレタリアートの政策として民族自決の旗を掲げていた。第一に民族自決を唱えたとして嶺野氏が高く評価する『金融資本論』中の叙述(本書、109頁)は、パウアーの影響を受けたものである。またパウアーは、オーストリアの解体を予期したが「期待」したわけではなかった。本書の行間には、嶺野氏がレーニンとスターリンによる、必ずしも正確でないパウアー評価の影響を受けていることをうかがわせるものがある。嶺野氏がパウアー研究の進展の成果を取り入れていないのは、残念でならない。

VI 「世界共同体」への見果てぬ夢

ユートピアとしての社会主義

20世紀初期の青年マルクス主義者たちの夢と言え、資本主義の矛盾に満ちた現実に対して、人類の理想社会である社会主義の実現にあったと言える。

わたしが「グレート・ユートピア」という本書のタイトルに心が惹かれるのは、マルクス主義的な社会主義も、いかに科学的な装いをして理想社会の追求であったという思いがあるからである。資本主義分析は科学であるが、理想としての社会主義は決して科学とは言えない。科学は、せいぜい勤労諸階級が人口の多数をなすにいたったとか、資本主義の組織化・社会化・計画化という歴史的な発展傾向(これとても新自由主義的な逆行を妨げるものではない)を説明できるにすぎない。そして経済の社会的管理の物質的基盤が形成されていく事実を指摘できるだけである。もちろん万物は流転する。資本主義が永遠に続く信仰することも現実的ではない。ただポスト資本主義社会の到来を想定しえたとしても、資本主義の歴史的諸傾向そのものが、かならずしも人類の理想社会を必然的にもたらすとは言えないということだけは指摘しておかなければならない。だからこそ矛盾に満ちた現実の社会の改善をめざす者にとって、科学を装うよりも、その導きの糸として、理想社会の追求としての社会主義が大きな意義をもつのである。この意味でわたしはユートピアという言葉に惹かれる。

現実の経験をとおして社会主義の魅力は失われた。また社会主義とは何かがあらためて問われた。だからこそ我々は、その原点であるユートピアに立ちかえるべきである。また現実にある材料・資材を組み合わせる具体的などんな理想的な社会主義をつくるかという社会工学的発想も必要であると思う。社会主義には、官僚的社会主義も民主主義的社会主義も、独裁的社會主義も自由な社会主義も、中央集権的社會主義も分権的社會主義(協同組合的社會主義)も、様々なグランド・デザインがあるのである。またぼう大な商品種類からなる精巧な現代経済を前にして、社会的所有に基づく計画経済を実現しさえすれば問題が片づくと言ってすませることはできない。経済の運営と経営の管理について、社会主義的経済システムの緻密な「設計」が必要である。

本書の著者である嶺野氏も、わたしと少し違うとはいえ、同じような思いではなかったか⁷⁾。ただ嶺野氏が社会主義の追求を、「世界生産から世界共同体」を実現していくこととしてとらえ、世界革命に傾斜していったことが気にかかる。世界革命の組織であるコミンテルンの研究家として、あまりにこれにとらわれた設定であったのかも知れない。わたしは、社会主義を追求する

ことと「世界共同体」を追求することとは一応区別しなければならないと考える。そうでなければ、現実に押されて自国における社会主義的改革に集中する者は、ナショナリズムに陥り、社会主義から後退したと評価することになる。ドイツやオーストリアのマルクス主義者がそうである。嶺野氏が指摘するようには、ヒルファディングが戦時中に社会主義を放棄したわけではない⁸⁾。彼も戦後に社会革命が到来することを熱望していた。だからこそ彼は、ドイツ11月革命を熱心に指導し、彼なりの革命的理論として「社会化」論を展開したのである。ヒルファディングが後に革命を放棄し、改革路線である「経済民主主義」論を唱えたとしても、この時彼は社会主義を決して放棄したわけではない。本書を読んで気になったのは、後年世界革命論者ブハーリンがソ連の社会主義建設に集中していった事実を、彼が後退したと受け取れるような記述があることである(本書、254-255頁)。

「世界共同体」への見果てぬ夢

小稿の最初のところで述べたように、本書で嶺野氏は、社会主義を「世界共同体」を意味するものとして考える。これを実現するのが世界革命である。これが「グレート・ユートピア」の意味である。マルクスにはじまり、おもに亡命社会主義者たちが思い描いた世界革命の立場に立ったのが、世界革命の組織であるコミンテルンであった。しかしコミンテルンは、旧ソ連の一国社会主義建設の現実に押される。かの世界革命の旗手であったブハーリンも現実に歩み寄っていく。コミンテルンは、結局、「独ソ秘密協定」の締結とともにその役割を終え、解散する。それとともに「グレート・ユートピア」の「夢想」も崩れ去った。幻滅はすでにレーニンの生前にはじまっていた。レーニンは、戦後革命が次々と失敗・挫折していくか不発に終わる西欧諸国の歴史を目撃しなければならなかった。嶺野氏は、1930年代にもう一人のレーニンになろうとしてそれが無理であったトロツキーを取り上げつつ、こう考える。レーニンは一人しかいなかった。「ヨーロッパにおいて『もう一人のレーニン』を獲得できなかった」。そして「たった一人の闘い」を強いられた(本書、256頁)。

嶺野氏のレーニンへの想いが以上のように語られる。しかし問題はそんなに単純であったのだろうか。レーニンがいかに関心したソ連における新たな官僚制の

出現に対して「最後の闘争」をおこなったとしても、わたしは、ロシアの後進性にとらわれ、独裁的社会主義をつくった責任のかなりはレーニンにあると考える。また幻滅は、オーストリア革命を指導したパウアー、ドイツ革命で指導的な役割を果たしたヒルファディングにも訪れる。彼らは戦後もあまり体制の揺ぎがなかった戦勝諸国が敗戦諸国に押し付ける厳しい現実と直面せざるをえなかった。つまり彼らもユートピアとしての社会主義を実現するという夢を破られたのであった。ユートピアを世界革命による世界共同体の実現に限定する嶺野氏の「グレート・ユートピア」論は、あまりにもコミンテルン寄りで西欧社会主義者たちの社会主義をめぐる苦闘を軽視したものではなかったか。彼らは、この苦闘をとおして、「福祉国家」をめざした第二次大戦後における西欧社会民主主義の路線を準備していった。確かにスウェーデンなどの「福祉国家」はリアル・ソーシャリズムよりはるかに優れていた。しかしこの「福祉国家」でさえ、市場崇拜が社会を支配し、グローバリゼーションによってはげしくなった効率性と利潤を追求する世界的な競争(メガ・コンペティション)という資本主義の現実の前に見直しと後退を余儀なくされていく。

嶺野氏のように、「『社会主義世界革命』が投機的思考の産物であり、ユートピアの革命だった」(本書、253頁)と言ってすまされる問題ではない。理想社会の追求としての社会主義そのものが、そのユートピア性を含めて、資本主義と市場経済の勝利とともに現実によって葬り去られたのだ。そして「市場の失敗」を意味する国際金融危機以後も再浮上しないのである。

本書で嶺野氏は、しかし、世界革命についてはもはや語らないとは言え、「グレート・ユートピア」が完全に終焉したとは思ってはいない。グローバリズムの支配のもとで「社会的な有機的全体性の世界が誰の目にもみえるかたちで登場し、「かつての社会主義者たちと共有できる」状況が現れる。「したがって来たるべき課題は、資本の世界を克服する世界社会の誕生の展望にならざるをえないだろう」(本書、283頁)。こう未来へ希望の糸をつないで、本書は終わる。

VI むすびにかえて

本書には、新しい研究、興味深い分析、生き生きとした叙述が含まれる。嶺野氏が本書の出版を打診した出版社のある編集者も「ウィーンやニューヨークなどの思いがけない場所で、生き生きと活動している革命家の群像が活写されていることには引き込まれました」と書いている。たしかに亡命社会主義者たちに関する叙述が、本書の最良でもっともおもしろく、生き生きとしたところをなしている。また、これまで繰り返し述べてきたように、転々とするロシアの亡命社会主義者トロツキー、ブハーリン、レーニンが本書の主役をなした。ウィーンのアロンにブハーリンが初めて登場した時のあやしげな話が印象に残る。第一次大戦中ニューヨークに亡命の地を変えたトロツキーを迎えたブハーリンが無邪気にも長の船旅で疲れ果てたトロツキーをまずはニューヨーク市立図書館に案内したなど興味深いエピソードに満ちている。しかし、わたし自身の関心に引きつける形で論じた小稿では、本書のこの最良の部分をうまく伝えることができなかつた⁹⁾。

註

- 1) 星野中「帝国主義論史における継承と飛躍」(『経済学雑誌』第71巻第6号, 1974年12月)「帝国主義論史における『社会化』論的系譜」(1)(2)(3)(『経済学雑誌』第72巻第2-3号, 第73巻第1号, 1975年2-3月)。
- 2) 嶺野氏は、ヒルファデーディングとつづる。わたしは、ヒルファデーディングと呼ぶ。小稿では、嶺野氏から引用する場合にのみ、ヒルファデーディングと表記することにする。
- 3) 『嶺野修 遺稿集』のⅢでは、「嶺野氏は大量の翻訳ノートを残したが、カール・レンナーの二つの論文については、手書きの翻訳ノートからWORDファイル(ファイルの最終日付は2006年3月8日)を作成している」(99頁)とコメントしている。そして、レンナーの論文「国民経済と世界経済——世界経済協議会に関する原則」(1927)と「戦後の社会主義政策の世界経済的基盤」(1928)の翻訳を掲載している。
- 4) ゼーマン・シャルラウ『革命の商人 パルヴスの生涯』蔵田雅彦他訳, 風媒社, 1971年。
- 5) 河西勝氏は、「パルヴスと帝国主義——『植民政策と崩壊』を中心に——」(『経済学研究』第21巻第4号, 1972年3月)を著している。
- 6) この点、嶺野氏はこう述べる。「……ホルテルが主張した不均等発展から再分割の論

理(=戦争の根拠)、階級闘争と帝国主義にたいする闘争を結合する論理を摂取し、さらにホルテルの観点を継承するブハーリンの不均等性論を介し、独占の経済的、地域的分割に標識化してみせるところにレーニンの『帝国主義論』の独自性がうかがえる」(本書、161頁)。

- 7) 本書では嶺野氏は「人類が失った『未来社会』の問題についてこう述べている。「……未来社会のグランド・デザインをえがくチャンスがめぐってきたということなのだ。ユートピア的社会主義から『人間のための世界をめざす世界的な社会変革』の志向を堅持し、高い志操性をもちながらも、現実的解決力のある試論がまたれるのである」(本書、265頁)
- 8) 嶺野氏が世界革命論の見地にたつて次のように指摘しているのは、言い過ぎであろう。「以上、ヨーロッパ戦争の勃発を契機に、カウツキーやヒルファーディングそしてレンナーやパウアーは少なからず色合いの違いをもつとはいえ、ユートピア思想を喪失し、明らかにナショナリストに転じていく」(本書、129頁)。嶺野氏には、今もなお、意外と、レーニンとコミンテルンの立場にたつて西欧社会主義者、第二インターナショナル系の社会主義者を批判する視点が残されている。
- 9) 本書の書評として、国富建治「<書評>嶺野修著『グレート・ユートピア』『嶺野修遺稿集』——第二インターナショナルとコミンテルンが描いた『世界社会』の構想を再考する——」(『トロツキー研究』No.63, 2013.12.25)がある。本書評は、とくに「『主役』としてのブハーリン」を取り上げた後、トロツキーの「不均等複合的發展」論などに対する嶺野氏の評価に異を唱えている。